

## 書評——松野敏之『朱熹『小學』研究』

新田 元規

### 序——著作に焦点をあてる型の朱熹思想研究として

朱熹の著作のいくつかは、彼の教説の体系性を反映して、篇章に特徴的な構成をつくっている。経書の注釈（『大學章句』『孝經刊誤』）と経書の注釈に準ずる編纂書（『儀禮經傳通解』）がその例であり、全体の篇立てが明確な意図をうかがわせるという点では、道学諸儒の選集（『近思録』）も同様と言えよう。また、経書の注釈類において、「経—伝」型に本文を配列することに拘りを見せているのも、朱熹の著作に顕著な特徴である。著作の構成と、教説の体系性が密接に関わることは、朱熹門人やその後継の著作・編纂物についてもあてはまり、『朱子語類』『性理字義』、それに「大全」型の性理書がその例である。朱熹といわゆる朱子学者たちの著作については、その篇章の構成を把握することが、彼らの思想を構造的に理解するための手がかりとなりうる。

朱熹の『小學』は、「大学」の前に設定された「小学」段階にお

いて学ぶべき内容を盛り込んだ著作であり、すべてが経伝や史・子書の記述の切り貼りから成っている。『小學』の内容が、朱熹の構想する学問の階梯において、修己治人の学（『大學』の内容である）に取り組むための準備段階に位置づけられるとして、『小學』書の篇章の構成に見られる朱熹の意図、その構成に経伝や史・子書の材料を組み込むための刪定の実際、同時代の訓蒙書と対比しての構成面での独自性は立ち入っては検討されていなかった。松野敏之氏の『朱熹『小學』研究』は、著作の体系的構成を手掛かりとする朱熹思想の研究を『小學』に及ぼし、同書の構成と、構成に資料を落とし込むための刪定の分析を通じて、朱熹の意図を明らかにしている。この点で、松野氏著者は、著作に焦点をあてる型の朱熹思想研究を前進させたと評価することができる。

以下、本書評は、主として、『小學』の構成をどう理解するかという点について、松野氏著書の成果とその問題点を検討する（第一章）。もう一点、『小學』の要石というべき「敬」概念に焦点をあてて、同書のうちでの「敬」の取り扱い、朱熹の「敬」思想との整合性何如という問題が存在することを指摘し、この問題についての

松野氏の見解を紹介・検討する(第二章)。

## 第一章 『小學』の構成に対する理解——

### 嘉言第五と善行第六の関係を中心として

朱熹『小學』は、『儀禮經傳通解』と同様に、経伝を主材料としてこれを節略・配列した編纂書であり、体系構築への志向と、「経—伝」型配列への拘りとがあいまって、六篇の關係と各篇の内部とに、明確な意図をもって構成がつけられている。松野氏著書第二章第二節「宋代訓蒙書と『小學』の構成」における詳細な論述は、『小學』のこうした構成面の特色に対する認識を新たにさせた。

松野氏は、『小學』全体の構成について、内篇の立教第一・明倫第二・敬身第三が「道理」を、内篇の稽古第四と外篇の嘉言第五・善行第六が「道理の実践事例」をそれぞれに内容とすると理解している。

配列の核としては「立教」「明倫」「敬身」を定めた。「立教」は、学問に取り組むことの重要性。「明倫」は、人が家庭や社会で生きていくために大切な人倫道德。「敬身」は、日常生活の挙措動作や礼節。この三者を小学として学ぶべき学問の要点として提示した。「立教」「明倫」「敬身」がそれぞれ立教篇(第一)、明倫篇(第二)、敬身篇(第三)となる。そしてさらに「立教」「明倫」「敬身」を実践した人々の故事や史話を、稽古篇(第四)・嘉言篇(第五)・善行篇(第六)で挙げていく。

……『小學』全体としては、立教第一・明倫第二・敬身第三が道理編、稽古第四・嘉言第五・善行第六が例話編に相当するような構成になっている。(『朱熹『小學』研究』第二章『小學』編纂、第二節「宋代訓蒙書と『小學』の構成」、九六頁)

朱熹が編纂に意を注いだ配列の工夫は、立教篇・明倫篇・敬身篇とそれ以降の稽古篇・嘉言篇・善行篇を分けたことである。話題の核は「立教」「明倫」「敬身」であるが、その例となる話を稽古篇以降に挙げたのである。……古来からの教え(立教篇・明倫篇・敬身篇)と、実践者の話(稽古篇・嘉言篇・善行篇)を厳然と分けたのである。このような編纂・配列の仕方は、当時において異例のものであったが、朱熹は経書に記された聖賢の訓え(道理)と後世に実践した人々の故事(例話)を対応させながら二部構成として『小學』を編纂した。(同上、終章「朱熹と小学教育」、「五、『小學』編纂の工夫」、二九七頁)

松野氏の解説のとおり、『小學』は、立教第一・明倫第二・敬身第三が「学問の要点」を示し、残りの稽古第四・嘉言第五・善行第六はそれぞれの内部を、「立教・明倫・敬身」に分かつて、この三要点の実例を示している。このように、『小學』一書のうちで、立教第一・明倫第二・敬身第三が、それ以外の三篇に対して基軸の位置を占めている点と、朱熹が「道理」と「実践例」との相補関係を意識して構成をつくっている点については、松野氏の理解は妥当であり、専らに内篇と外篇の間に内容の質的な相違を見て取る従来の解説は、修正を要する。

評者が松野氏の理解について疑問を覚えるのは、「経」としての立教・明倫・敬身三篇を補完する役割にあたる稽古・嘉言・善行三篇のうち、特に嘉言第五の内容をどう理解するかである。嘉言第五に採録されている「事親奉祭、豈可使人爲之」（第二十章・廣明倫、張載）、「……若取失節者、以配身、是己失節也。……然餓死極小、失節事極大」（第四十四章・廣明倫、程頤）といった語は、規範それ自体を内容としており、「例話」や「実践例」とは概括しがたい。嘉言第五が「実践例」ではないとなれば、同篇を、稽古第四・善行第六と同質の篇として横並びに位置づけることにも問題があるだろう。

外篇を構成する二篇の内容と相互関係をどう理解するかについてのこの疑問は、内篇の構成、特に、立教第一・明倫第二・敬身第三と稽古第四の内容と相互関係をどう理解するかも関わっているため、まずは、内篇の側をめぐるこの問題を確認する。

内篇における立教一・明倫二・敬身三と稽古第四の関係は、稽古篇の序に示されている。

孟子道性善、言必稱堯舜。其言曰「舜爲法於天下、可傳於後世。……憂之如何、如舜而已矣」。摭往行、實前言、述此篇、使讀者有所興起。（朱熹『小學』稽古篇第四・序）

右の序文のうち、「摭往行、實前言、述此篇」は、松野氏著書では「古人の言行をとりあげてこの篇をまとめるのは」と訳され、これに対応して、稽古篇の内容は、「経書や史書などの文献からそれぞれ「立教」「明倫」「敬身」を実践した人物の言葉や行動を集め

たのである」と概括される（『朱熹『小學』研究』、八〇頁。傍点評者）。松野氏はこのように、「摭往行、實前言」にいう「往行」と「前言」を、「古人の言葉や行動」と一括りにし、そのいずれもが敬身第四の内容を指すと解する。しかし、伝統時代から現代に至るまで、『小學』の注釈は、一般に、稽古第四の序にいう「摭往行、實前言」のうち、「前言」とは立教第一・明倫第二・敬身第三の内容を指し、「往行」のみが稽古第四に挙げる実践例であると解する。

考虞夏商周聖賢已行之迹、以證前篇立教・明倫・敬身之言也。（陳選『小學句讀』卷四・稽古第四、篇題注）

朱子すでに立教・明倫・敬身の三篇をしるす。又いにしへ三代以上の聖賢の、立教・明倫・敬身のことををこなへる、事跡をかながへて、此の一篇をしるし、さきの三篇にある説の、むなしからざる証拠とせらるるなり。……「往行」は、往古の人の行跡なり。これを「摭（とる）」とは、とりてしるすぞ。其とる所の行跡は、即みな立教・明倫・敬身のことなり。「前言」は、前世の人の言語なり。即立教・明倫・敬身の篇にしるす所、皆「前言」なり。「往」といひ、「前」と云は文を互にして相通ず。これを「実（まこと）」とは、これを証する義なり。今とる所の往行を以て、さき三篇の「前言」の、むなしからざる証拠とす。（中村惕齋『小學示蒙句解』内篇・稽古第四、篇題注）

立教第一・明倫第二・敬身第三のすべてが「古昔聖賢之言」であるわけではないが、三篇は、「孔子曰」「曾子曰」「孟子曰」「荀子曰」といったように、「聖賢の言葉として表現された道理・規範」

を内容の一半としており、これら三篇を、「前言」と概括することに無理はない。立教第一から敬身第三までが、「言」であるとすれば、これに対応して、稽古第四の内容は、「聖賢の言行」ではなく、「聖賢の行」に限られる。

稽古篇第四・序の「撫往行、實前言」について、伝統的な注釈に沿い、「前言」が立教第一・明倫第二・敬身第三の内容を指すと解すると、内篇の第一・二・三と第四は、それぞれを次のようにとらえ直すことができる。

立教第一・明倫第二・敬身第三は「道理・規範」を内容とし、「聖賢の言葉」として示された道理・規範」という点では、「言」とも表現できる。また、稽古第四における「実践例」の内容は、「言」を含まず「聖賢の行」のみである。

内篇全四篇の内容をこのように理解するならば、外篇の嘉言第五の内容は、内篇の立教第一・明倫第二・敬身第三に対応するものとして、「立教第一・明倫第二・敬身第三の『前言』にもとづき、後世の賢哲たちがこれを敷衍した『言』である」と概括するのが適当であろう。「敷衍」という表現をとるのは、『小學』嘉言第五の内部区分を表示した「廣立教」「廣明倫」「廣敬身」という語の「廣」字の意味を汲んでのことである。嘉言第五もやはり、「言」とはいいつつ、その内実は「規範・道理」であり、「実践例」ではない。そして、外篇においては、善行第六のみが、内篇の稽古第四に対応して、「行」（実践例）を内容とする。

〔内篇〕

立教第一・明倫第二・敬身第三……規範・道理およびそれを聖人が述べた「前言」。

稽古第四……規範・道理の実践例としての「往行」。

〔外篇〕

嘉言第五……規範・道理および「前言」を漢以後の賢哲が敷衍した「言」。

善行第六……規範・道理の漢以後における実践例としての「行」。

右の理解では、『小學』全体の構成について、「立教第一・明倫第二・敬身第三が道理・規範、それ以外の三篇が実践例」というように内・外篇の仕切りを棚上げにして全体を二分するのではなく、内篇と外篇のそれぞれの内部において、「道理・規範」と「実践例」という構成がつけられていることとなる。「古典に見える聖賢の言と行」（内篇）と、「後世の賢哲の言と行」（外篇）との関係は、さしずめ朱熹の学における『四書』と『近思錄』との関係に類すると考えようか。具体的に見ると、敬身第三の「孔子曰——非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動」（第三章。『論語』顔淵篇）と、嘉言第五の「伊川先生曰——顔淵問克己復禮之目。孔子曰『非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動』、四者身之用也。由乎中而應乎外、制乎外所以養其中也。……」（第六十八章・敬身・心術之要）の二章は、敬身第三と嘉言第五との間で、「道理・規範」と「実践例」という関係ではなく、「道理・規範」と「道理・規範の敷衍」という関係がつけられていることが見えやすい。

松野氏も、嘉言第五の内容をふまえて、それが単なる「実践例」のみでないことは了解済みであり、それゆえに、部分的に「この道理を実践した人の話や道理に適った発言」（『朱熹『小學』研究』、七九頁）という表現をとっていると思われる。嘉言第五を強いて「実践例」の範疇に押し込むよりは、内篇における「前言」と「往行」の関係と対応させ、外篇についても、「嘉言第五は、賢哲たちの『言』という形をとった道理・規範。実践例としての『行』は、善行第六のみ」として解するほうが、『小學』全六篇の内容の実際に対応するであろう。

嘉言第五の内容を「道理・規範の敷衍」として理解するならば、嘉言第五が『小學』全書のうちで占める重要性の度合いを一考する余地が生じる。朱熹は、敬身第三において「心術之要」を区分しているが、実際に「心術之要」の範囲に収録された古典の文言を見ても、「ふるまいを敬（つつし）む」ことと、「心を保持し覚醒させておく」こととの関係が目に見えるように説かれているわけではない。一方、嘉言第五に採られる「只整齊嚴肅、則心便一。一則自無非辟之干」（第六十五章・廣敬身、程頤）といった語は、それとわかるように、外面のつつしみが心の集中をもたらすことを説いており、嘉言第五のこうした語を前提にすることで、あるべき立ち居振る舞いを述べただけの素朴な規範が、なぜ「敬」をめぐる「心術之要」に相当するのか了解できるようになっている。第六十五章にかぎらず、「敬」の「心をつつしむ」面は、嘉言第五の「敬身」項においてよく説明されており、朱熹が、「敬」の教説を、『小學』のうちに彼の考えるような内実でもって組み込む上で、嘉言第五に収められた二程ら先哲の言は、特に重要な役割を果たしている。

## 第二章 『小學』における「敬」の内実—— 『小學』における広汎な「敬」と朱熹の「敬」 の対応

朱熹『小學』は、洒掃應對のし方や父母師友間の倫理だけでなく、これら個別の規範を支える「敬」の姿勢に重点を置き、中核を成す一篇として敬身篇を設けている。『小學』への「敬」の組み込みの実際を、収録文献の選別と加工の実例にもとづいて明らかにしたのも、松野氏著書の意義である（第五章「敬身篇の編纂」）。

松野氏によれば、朱熹は、『小學』一書において、「敬」の教説を古典に基礎づけ、小子が「敬」を身につけるための着手点を示すことを意図しており、こうした意図のもと、古典の文言に「敬」を読み取り、また文言の刪定を通じて、「敬」概念の内実を調整を施した。松野氏の挙げる事例でいえば、『禮記』哀公問に見える「敬」の文言を、敬身第三の序に組み込むにあたり、刪定によって、「妻・子・我が身体を敬む」から「我が身を敬む」へと一般化しているのは、こうした調整の典型例であろう<sup>⑧</sup>。

『小學』が、古典の文言のうちに「敬」を読み取る上で、ある程度その含意に幅を持たせていることは、朱熹の「敬」をめぐる教説と対応する。朱熹は、「敬」概念を対他的なものとしてだけでなく自己完結的なものとしても解し、また、容貌威儀に類した外的なふるまいの面だけでなく、これに応じた心的態度としての「敬」をも強調しており、総体として、「敬」の内実を拡張気味に整備している。朱熹がこのように「敬」を自他と内外に広げて設定すること

は、彼が「敬」を日常のあらゆる場面にわたって持続される取り組みとすることも整合する。松野氏が、『小學』一書における広がりのある「敬」を、基本的には朱熹の「敬」思想の反映として理解していることも、基本的には首肯できる。

ただし、改めて『小學』一書の「敬身」項に分類される内容を見渡した場合、その内容は、「自己完結の敬」や「心的態度としての敬」といった拡張とは次元を異にして著しく広汎である。「読書が敬である」というのは、「心を専一にさせる修養の一環」としてまだしも整合的な説明がついているが、「仁人者、正其誼、不謀其利、明其道、不計其功」(嘉言第五・第五十六章・廣敬身、董仲舒)も、「大學」、孔氏之遺書、而初學入徳之門也。……(嘉言第五・第八十一章・廣敬身、程頤)もすべてが「敬身」であるとなると、およそ、「修身」相当の内容であれば何でも「敬身」に入れられるかに思われる。

松野氏は、『小學』において「敬身」に分類される章の内容が、「敬」とは関係が希薄に思える場合でも、朱熹の意図を丁寧に汲み、それが「敬身」の一環を成す所以を説明し、『小學』における「敬」を、一応の思想的まとまりをもったものとして把握する。「危急の所に抜け穴などを使って姑息に逃亡することはなかった」、「生涯を通じて清廉や質素を貫いた」というのも、「徹底して規範意識を維持する」ということでは、「動時・静時を貫いてあらゆることに敬(つつし)むこと」という「敬」に包括され得るのである。と、松野氏のように、朱熹が現に「敬身」のうちに包摂している広い意味に即して、『小學』一書の「敬」を把握するというのも確かに解釈の一の立場であろう。

評者はといえば、先に挙げた「敬」との関連が希薄な諸章から考えて、『小學』における「敬身」の内容が広汎に過ぎ、「いまま分の目の前にあつて為すべきことを正しく行っていくことに意識を集中する」(『朱熹『小學』研究』、二三〇頁)という「敬」の核心をぼやけさせていることは否めないと考えられる。『小學』の「敬」が、その内実として散漫のきらいがあると認めることで、そうした事態を余儀なくしている『小學』編纂の方向性を新たに検討することはできないだろうか。評者も、この点について明確な見通しがあるわけではないが、松野氏著書の成果を土台とした『小學』研究の展開の可能性の一つとして提言したい。

### 結語

以上、『小學』六篇の相互関係と、『小學』書における「敬」と朱熹の「敬」思想の対応何如という二点について、松野氏著書の成果を確認し、その上で、評者の異見を提起した。今後、松野氏と後続の研究者が、『小學』研究をよりいっそう進展させるための問題提起となれば幸いである。

### 《注》

(一)『小學』が解説される場合、内篇と外篇の区分が先入観となるためか、六篇のうちで「道理」と「実例」の関係がどのようにつけられているかが正確に説明されていない。宇野精一『小學』(明治書院、一九六五年)の「解題」は、『小學』は内外二篇に分かれており、内篇は経伝

を引用した儒教倫理概論、外篇は内篇に説かれた所の正しいことを漢以降の人々の言行によって実証したものである」と説き、また、『朱子全書（修訂本）』（上海古籍出版社・安徽教育出版社、二〇一〇年）第十三冊所収『小學』の王光熙・王燕均「校点説明」は、『小學』分内外両篇、内篇重在説理、為全書之正篇。外篇則重在實證、為全書之附編」と説く。こうした説明には、上篇の稽古第四が「実証」であることが反映されていない。また、本文で後述するとおり、下篇の嘉言第五はむしろ「説理」といふべき内容である。

(二) 中村惕齋『小學示蒙句解』は、『漢籍國字解全書』第七卷（早稲田大学出版部、一九三三年）収録に拠る。引用部は一九九・二〇〇頁。引用にあたり、読点を一部句点に改め、中点・引用括弧を新たに用いた。

(三) 敬身第三に採られる「居處恭、執事敬……」（『論語』子路）、「出門如見大賓……」（同顔淵）といった文言を念頭に置く。

(四) 『朱熹『小學』研究』第五章「敬身篇の編纂」、一三二頁。

(五) 朱熹は、「敬」が行われるのは、「敬う」相手が存在する場合に限る」との説を批判して、「対象が特定されない敬」を説いている。

『朱熹『小學』研究』第五章「敬身篇の編纂」、一二七頁。「敬」が心を対象に集中させる修養であることについては、同前二二九・二三〇頁。

(六) 『朱熹『小學』研究』第五章「敬身篇の編纂」、一四六頁。

(七) 稽古篇の第三十八章（敬身・心術之要）は、孔門の高柴（子羔）が、日頃から君子の振る舞いを心がけ、危急のおりにも抜け穴からの逃亡を拒んだ逸話を『孔子家語』から採録する。この逸話が敬身項に採られた趣旨を、松野氏は次のように説明する。「朱熹が高柴を「敬」の例とみなすのは、逃亡すべき非常時であっても、常日頃から実践してい

た行動規範に一貫して従う姿勢を重視するからであろう。『小學』では、生涯にわたって清廉・質素・行動規範を徹底させたことも「敬」の心術の例として示すのである」。朱熹『小學』研究』第五章「敬身篇の編纂」、一三八頁。

(八) ごく単純な解釈としては、朱熹が、『小學』に、「小子のまず学ぶべき」内容にとどまらず、生涯を通じて取り組むべき事柄や、学問の全体に見通しを与える事柄（立教序にいう「教える所以」や「学ぶ所以」）までも盛り込もうとしており、こうした意欲が、「敬身」の内容の散漫化に影響しているのではないか。

